

---

## A STUFFED OF AN ANIMAL

### 動物の剥製作成講習会研究報告

新 保 守

#### I はじめに

2、3年前から、私のような能無しのところに「理科の先生である」というだけのこと、再三校下の獣師から電話がかかってくる。最初は教材にでもなつたら……、これなら話ははやい。仲間が集まるだけで、酒の一本もあれば、ことは簡単に処理できる。次にはおそるおそる、実は獣にいいたら田んぼにめづらしい鳥が落ちていたんですが、といって禁鳥（おみづなぎどり、あおさぎ、このはづく）のたぐいをもちこまれる。県に問合せると、死鳥といえども勝手に処理してはならないとのこと。腹の虫をおさえて、お引取り願う。その次ぐらいになると、「先生は剥製もなさるんですね、うちの息子がそらく感心しておりました……。実はお見事なやまとりを一羽取りましたが、なんとかお願ひできませんでしょうか。」この次には先生にはもっと立派なやつをおとりします、という魅力に引かれて、つい能無しを忘れて手がけてしまう。

人がみたら、おかしくて笑い出したくなるようなスタイルに仕上がるが、当の本人だけは結構楽しく、また真剣であることを思うと、これも我慢していただくことにしよう。

折しも幸なことに市社会教育課、郷土博物館、学校長の御好意によって、2月17日から1週間、国立科学博物館で動物の剥製作成の講習会に出席させていただき、感激のきめないうちに、その一部、鳥類の剥製作成研究の報告をいたします。

なお、私は福井県の人間国宝とうたわれる東谷先生の手ほどきを受け大恩のあることを心に深くかみしめながら、この項では国立科学博物館の本田晋先生の講議にもとづいて筆を取らせていただきます。

#### II 本田晋先生のプロフィル

私の鼓腹が、生糸の東北弁で刺激されたのは今日が初めてである。

風貌たるやまさに仙人。頭髪長く口ひげボウボウ、櫛を入れることを好まず。ホホ骨がはって、右眼満眼、左眼半眼、メスを握りしめた容姿は、まさに大日如来の生まれかわり、密教仏像とでも申し上げておこう。



国立科学博物館技術課 本田晋先生  
— 44年2月20日スケッチ —

な生命がよみがえってくる。その道に悟りを開いた人間にのみ見られる気高い姿こそ、名人そのものである。

なんでも先生のお父さんが、我国最初の剥製なるものを開発され、その門をたいた坂本喜一先生が動物の剥製学を確立され、昭和6年に平凡社から「動物の剥製及び標本の製作法」なる書物を発刊された。その中の解説図解を、本田先生等がおかげになられたとか、まことに立派で価値ある書物だが、重版されることなく絶版になってしまったことは、同好の志にとっては残念至極といわざるをえない。

なお、参考までに、昭和36年8月15日号写真公報に「はくせいづくり」と題して、本田先生のおかきになられたものがあるが今となっては手に入ることもないという。

### III 剥製の種類

#### ○本剥製

この剥製法は、標本および装飾用、又は鳥獣類の生態等に用いられるため自然の姿勢を現わして作らなければならないもので、技術者の最も苦心を要する。

#### ○仮剥製

この剥製法は、特殊な姿勢を与えず、いわゆる仮の剥製である。容積もとらず取扱いも便利で研究家には最も適した製法である。

あやしいまでに厳格な容姿とは別に、瞳はことのほか優しく、慈愛に満ち、すべての生きものを愛し、死せるものに活を与えずにはおかないひどきに頗りしている。

先生の講義には言葉だけではない。すべては態度の中で教えている夢中になると、もうそこは先生だけの世界のようである。白衣に血がとび、薬品が袖をぬらし、ホルマリンが眼を刺激する中で、涙をボロボロこぼしながら、無心にメスだけが皮を剥いていく。針金が骨片をつなぎ、糸が縫い合せていくと、そこに新たな

### ○半剥製

材料の保存を目的とし、後日本剥製又は仮剥製いずれにも改作ができる半成品である。これは旅行先又は、採集に便利な製法である。

## IV 剥製に必要な器具

○測定用 コンパス、物差、拡大鏡

○剥皮用 解剖刀、解剖ばさみ、骨切りばさみ、砥石、ピンセット、脳搔き、自在鉤、丸錐、

○製作用 噛切、ヤツトコ、ベンチ、平ヤスリ、金鎌、鋸、錐、くじり、柄付針、縫針、毒壺  
ブラシ、虫針、櫛、小筆

## V 薬品

○亜比酸、アルコール

○代用薬品(調合) ホウ酸末 130g

焼ミヨウバン 60g

パラジクロールベンゼン 60g

## VI 各種鳥類のしん針金の太さ

スズメ	羽 26 番	首 24 番	足 22 番
モズ	24	21	20
ツグミ	22	20	17
カケス	20	17	16
ハト	19	16	15

## VII 記録と測定

できるだけくわしく、実測とスケッチをしておくとよい。

雌雄の判明、食餌の検査も必要である。

## VIII 鳥類の本剥製法(ハト)

### A 剥皮法

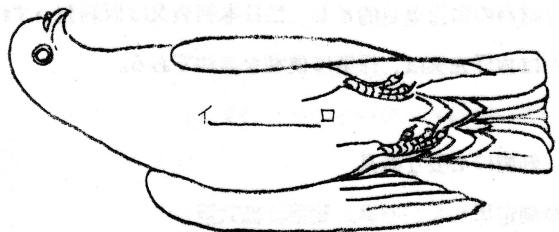
1 頭部を左側におき胸毛をぬらし

て、胸から下腹まで切開、そして  
左右の皮をつまんで肉と皮をきれ  
いにはがす。

1 口に綿をつめ糸でしばる。

2 肛門に綿をつめる。

3 イから口の方向に胸剥法にて剥皮する。



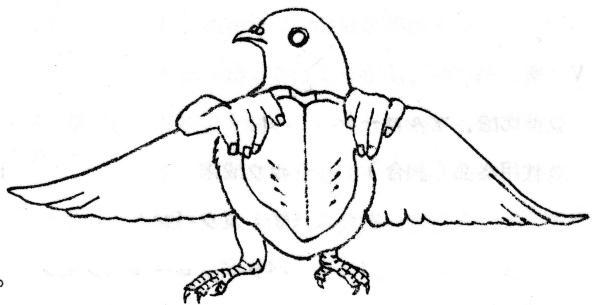
2 頭を手前におき、切開部を人差

指と中指で皮をおさえ、親指で背  
をおさえてうつぶせにするようにし  
て肉をおし出す。

1 無理なようだが、両肩を胸より  
反転する

2 血液や肉汁は、カーゼでふきどる。

3 皮がむせないようとくに注意

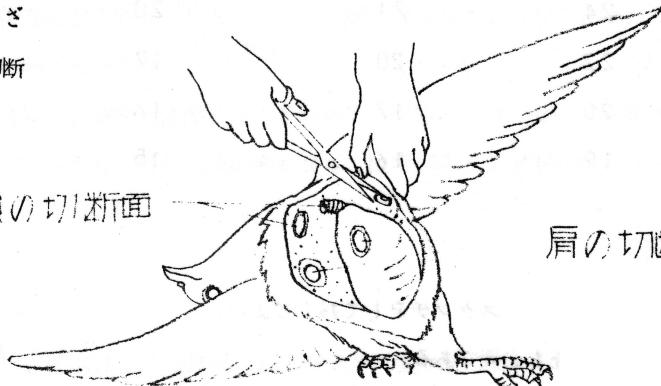


3 肩の関節から左右とも切断する。次に首のつけ根から順に背に回しながら、足の部分は人間

でいうと、ひざ  
の関節から切断  
する。

頸の切断面

肩の切断面



1 肩の関節は最初メスを使用

2 頸はつけ根から切断することが大切

3 途中にて足の関節を第1よりはずす

4 順に尾骨まで皮を剥ぐ。こゝの切断は油っぽの胴よりの所から切らないと、尾羽がどれてしまふから特に注意が必要である。



- 1 大きなものは、つり手にぶらさげると剥しやすい
- 2 尾骨の肉の処理をていねいに

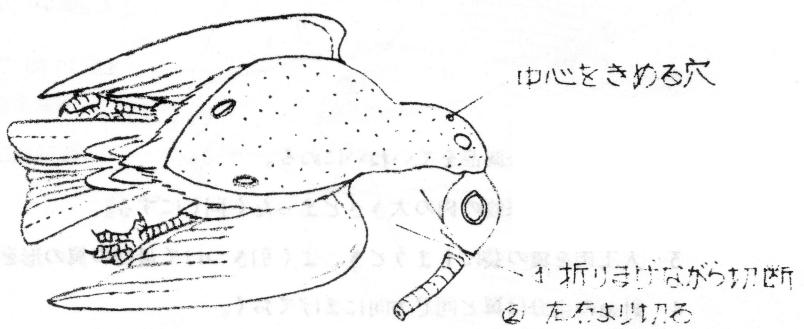
5 羽の第一関節までは普通にむきやす  
いが、第二関節からの風切りは骨  
に密着しているから、親指でこきお  
ろすようにするとよい。

- 1 肉は小さなはさみで切りとって  
いく。
- 2 ガーゼにて肉をふきとる。
- 3 骨はかならずハトロン紙にまいておく（むれをふせぐ、脂肪の除去のためとくに大切）



6 両翼が終ったら首  
のつけ根の切断部を  
引出し、頭部は注意  
し、耳、眼球を破損  
しないよう皮を剥く。

- 1 頸は袋を廻しながら  
がら剥いていく。
- 2 耳は引出しながら剥いていく。



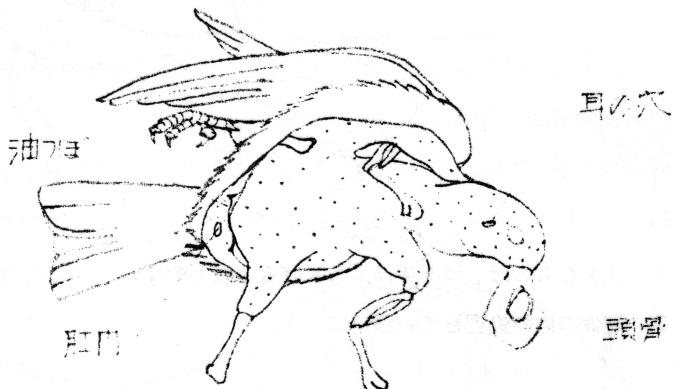
- 3 眼球にそいながら、まぶたを切らずに剥ぐ。
- 4 口ばしの先たんまでていねいに
- 5 脳出し……脳膜をピンセットでつまみ出す。
- 6 頸に紙をまいて、もとにもどす

7 剥皮法の最後は足である。

足の関節はひざ上がりがないので非常に剥ぎやすいが、力を加えるとやぶれやすい。

- 1 羽と同じように、小さなハサミとガーゼで肉を処理する。

- 2 脂肪処理と、むれふせぎのため必ずハトロン紙にまいてもとにもどす。

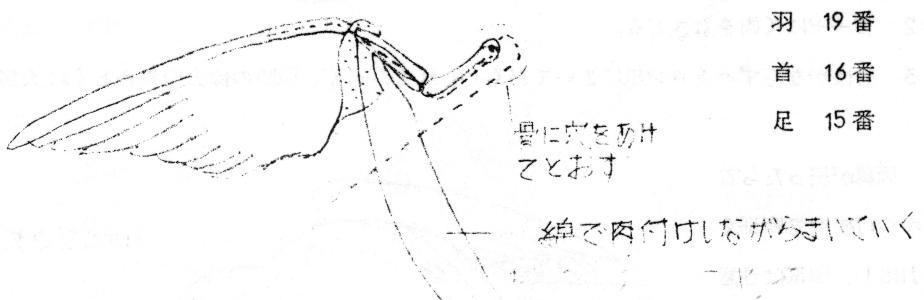


## B 製作法

8 この段階より製作法になる。第一に羽の除肉した骨の内側に針金を風切の先端まで差し二ヶ所を結び、綿で肉付けをする。

針金の選びかた

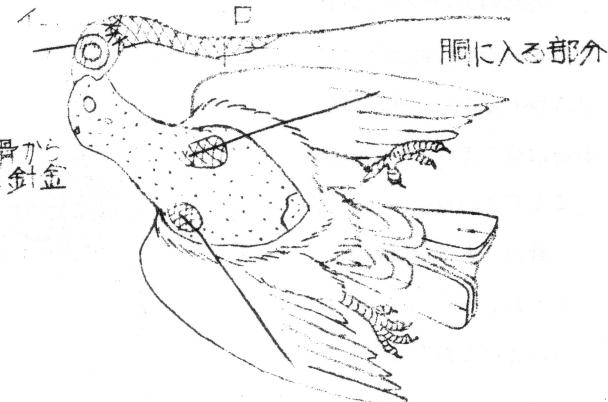
例... ハト



- 1 小筆にて調合薬品をていねいにぬる。
- 2 肉付けは、実物の肉の大きさとまったく同じにする。
- 3 人工肉を翼の袋にしまうとき、よく引きつけて最初の翼の形をととのえる。
- 4 針金の余分は翼と同じ方向にまげておく。

9 首のしんはもとの寸法通り

針金と綿で作り、実物どおりにまきあげ、頭骨におさめて縫いつける。眼球を除いた分は粘土をつめておぎなう。



1 イの部分をしっかりと結びつける。

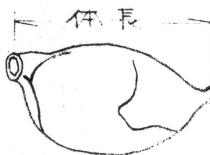
2 粘土は少々厚めに

3 繩はやゝ太めに

4 糸はていねいにかるく図のようにまく

10 脳はパッキン(もく綿)で実物とまったく同じ大きさ、形を作り、糸でととのえ両翼のつけ根、足などに印をしておく。

1 パッキンは、全体が軽くて表面がかたく、がっちりしていなければならない。



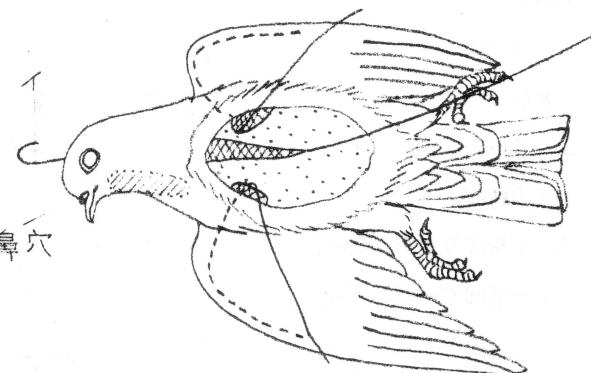
脳芯(模本)

2 木型で脳しんに穴をあけ、頭しんをしっかりとさしこみ次の図解のようにとめる。



11 防腐剤はすべての内側にぬる。

首部の復元はピンセットで皮や綿がねじれないようにていねいに着せる。



1 しんになっている針金を動かしながら、手早く元の位置に直す。

2 外側の羽毛も調整する。

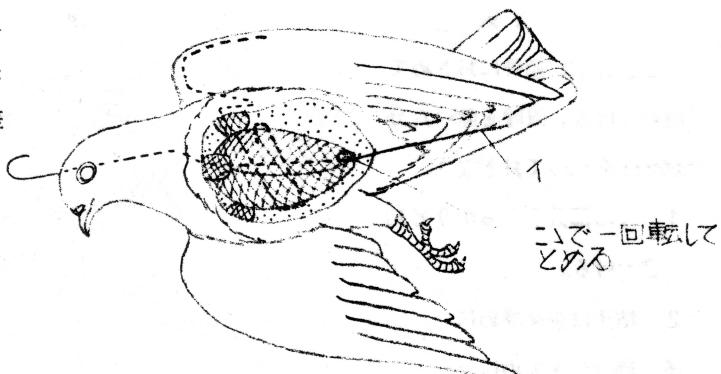
3 鼻穴に綿を入れる。

4 のどもとにパットを入れてふくらす。

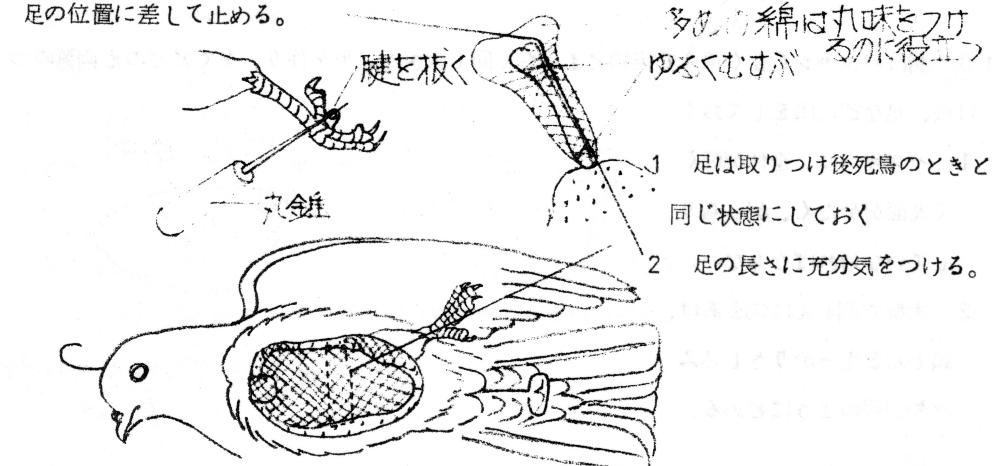
12 首肩の印のついた胴し

んに首羽の順に針金を差し  
込み胴しんの反対側に出た  
針金は折りまげてしんに差  
しこんで止める。

- 1 針金イを油つぼの下よ  
りとおし——のよ  
うにまげておく。

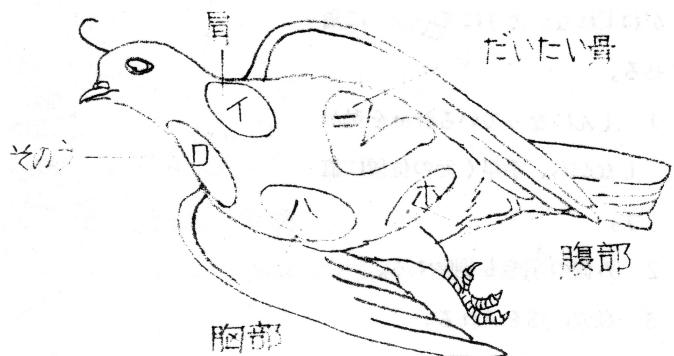


13 足のひらから腱を抜く、そこから針金を差し骨にゆるく結びつけ、肉付けをして胴しんの足の位置に差して止める。



14 胴しんと皮の間、特に首モモの部分に生きている時の姿を再現する意味で綿をパットし、下腹よりチドリかぎで胸の方に縫い上げる。

- 1 縫い仕上げ前に整型  
をねんいりにする
- 2 イ~ホに補助パット  
を入れる。
- 3 下腹よりチドリ縫い  
2~3回で一回しばる。



---

15 眼球の色は生前をよく観察しておいて義眼を製作する。はめこんだら、一度死んだ自然の状態にまぶたを閉じさせ、中心を確かめてから、まぶたを開かせる。

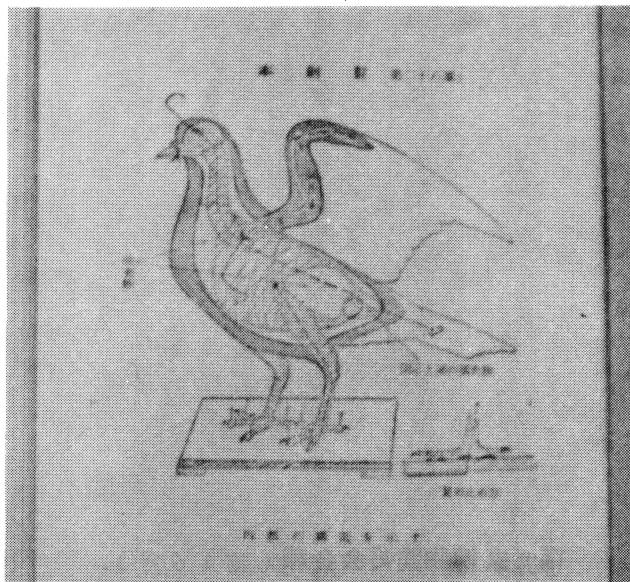


イ 形良くするために補助粘土を入れる。

ロ 煙草の銀紙を眼球のうらに入れる。

### C 整形法

16 製作法が終ってから、台木にとりつけ、整形するが、これが生きているような剥製でなくてはいけない。



X 一度死んだ動物が、そのままの姿でよみがえる。これは古代エジプトのピラミットの中に今なお、眠り続けるミイラのように人類最大の願いであるのかも知れない。

しかし、剥製はいかにも剥製に見えてはいけない。永久に生きつづける状態、正確な測定に役立ち、科学的な研究に貢献する剥製こそ、我々の願いであります。今後に残された研究の課題でもあることを肝にめいじ精進していきたいと思う。